

平成28年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の重点目標	1 主体的学習者の育成 2 キャリア教育の充実 3 積極的な活動の創成 4 広報連携力の発展と国際理解教育の充実 5 定時制教育の充実
-------------------	---	----------	---

年度当初				評価結果		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価
1. 主体的学習者の育成(企画推進)	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・生徒の家庭学習は部活動との両立の中で確保され、日々の学習が緊張感と落ち着きの中で進められている。 ・生徒は時を守り、規律徹底に向けて主体的に行動し、学校生活が活気と品位ある言動に満ちている。 ・教職員に協働性、同僚性の意識が浸透し、学年、分掌、教科間で連携した指導が行われている。	・家庭学習時間は全学年の1日平均は3時間を超えたが、過去3年間の1、2年生の家庭学習時間は減少している。 ・「遅刻0運動」による指導の結果、「遅刻0の日」が各学年で6割以上になっている。生徒は時間を厳守することで集団の一員としての意識を持ち生活できるようになってきた。 ・担任、教科、分掌の間で問題が共有できないこともあった。 ・主任会等の会議が生徒の諸問題を学年、分掌、教科を越えて議論できる場として機能してきた。	・家庭学習の仕方の指導を進めるとともに、アクティブラーニング型授業を通して生徒の内発性を喚起する。 ・指導を要する生徒には、必ず教科担当と部活顧問が連携して対応する。 ・家庭学習調査を継続し、結果の分析を行う。 ・「遅刻0運動」を継続する。 ・始業前の朝の時間の有効活用等先見性のある行動を生徒に意識させる。 ・会議においてはあらかじめ資料を配布し、学年、教科、分掌で問題点を共有し、検討できるようにしておく。また、必要に応じてメンバーを招集し柔軟に対応する。 ・連絡ボードやネット掲示板を活用して問題点を共有する。		
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・「アクティブラーニング」の教職員研修を通じた授業改善によって、生徒が達成感と自己肯定感を感じられるものとなっている。さらに発展的学習を進めようという積極性や自主性、内発性が生徒の学びに見られる。 ・思考力・判断力・表現力を高める授業活動を展開し、これからの大学入試や実社会に必要な教科横断的な総合的学力を養成し、生徒の学力を的確に評価できている。	・アクティブラーニングの手法は本校に定着しつつある。しかし、授業評価アンケートでは、「課題以外でも、授業からさらに発展した内容を自発的に学習している」が50%台後半にとどまっており、生徒の自主学習の促進という面では十分とは言えない。 ・今後求められる学力をどう評価するのか不明確であり、新しい大学入試も改革途上である。 ・テストや考査が従来のような知識重視型のものにとどまっており、アクティブラーニングで生徒に活動させた成果を計測・評価できる問題が少ない。	・授業内の活動をベアワークからクラス全体への発表や討論などへ発展させる。 ・筆記テスト以外に、研究課題を与えるなどして、そのレポート提出や内容によって加点法で成績をつける等の活動を行うことで、生徒の積極性や自主性、内発性を育てる。 ・テストや授業評価の研究者による校内研修を行い、授業とテストとの関連づけや生徒の能力を正しく計測するための問題作成を全教職員が学ぶ。 ・アクティブラーニングを活用した授業を計画実施し、その学習成果を計測するためのテスト問題を科内及びアクティブラーニング小委員会などで検討する。		
2. キャリア教育の充実(キャリア形成)	OJTの充実と進路指導力の継承 ※OJTオン・ザ・ジョブ・ラーニング	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。 ・全教職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・様々な学校行事が生徒のキャリア形成に必要なものであるという意識が教職員に十分に浸透していない。 ・「倉吉東高のかたち」における「21世紀をリードする人材の育成」とキャリア形成とのつながりについて、生徒・保護者ともに理解が不十分な状況が見受けられる。社会貢献という観点を含めた進路設計ができなかったり、自己決定ができない生徒が一部に存在する。 ・1・2年生の進路検討会を従来よりも早く実施し、生徒に志望校と現状との差を考えさせる機会を確保したが、生徒自身の意識を変えるには十分とはいえない。各学年の進路検討会には2/3程度の教職員が参加しており、意味のある内容の濃い情報交換が行われている。	・教職員が様々な学校行事の意味を理解し、折りに触れて生徒に自分の言葉で語ることにより、生き方指導を積極的に行う。 ・学年・他分掌との連携を一層推進し、本校の教育活動にあらゆる場面で「倉吉東高校のかたち」の理念の浸透を図る。講演会や進路学習等を通じて、生徒が自分と社会との関わりの中で今後の社会に必要な資質を理解できるように指導する。 ・1・2年の進路学習の内容を一層充実させる。大学調べや学部学科調べをもとに、志望理由書を社会貢献という観点から作成し、生徒が自らの進路を主体的に考えられるよう、指導の充実を図る。 ・各学年の進路検討会において積極的な発言を促すとともに、検討会や担任会での情報交換を充実させ、生徒の志望と学力の分析に基づいた適切な進路選択ができるようにする。 ・研修等で得た情報の共有を一層進める。 ・学年主任間の情報交換を密にして、学年間の連携を図り、的確な進路指導ができるようにする。		
	中堅・難関大学合格者数の向上	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数60名以上。 (現役合格者数45名以上) ・難関大学現浪合格者数20名以上。 (現役合格者数15名以上) ・東京大学現浪合格者数5名。 (現役合格者数3名以上)	【国公立大学現役合格者数】 H25年度120名 H26年度131名 H27年度140名 ※H25年度より5クラス 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H25年度49名 H26年度45名 H27年度51名 (現役合格者数) H25年度28名 H26年度27名 H27年度37名 【難関大学現浪合格者数】 H25年度25名 H26年度18名 H27年度24名 (現役合格者数) H25年度13名 H26年度12名 H27年度16名 【東京大学現浪合格者数】 H25年度 1名 H26年度 1名 H27年度 5名 (現役合格者数) H25年度 1名 H26年度 0名 H27年度 2名	・1年次から志望校指導を行い、3学年を通じて適切な進路目標を設定できるよう支援する。 ・教科学年主任会で検討した定期考査や模擬試験における学力分析を基に学習指導を充実させる。 ・長期休業中の補習計画を再検討し、理系科目の充実を図る。 ・新課程における新分野の出題や高大接続改革に伴う入試内容の変更について、情報収集や分析を行う。 ・思考力や表現力の育成を目標に入試問題研究を行い、授業への反映を図る。 ・1・2年において、難関・中堅大学訪問を通じてより高い志望を持たせる。 ・志望校と学習習慣をフォローしながら、面談や3年次の放課後課外などを通じた適切な指導を行う。 ・県外高校との交流や本校独自の講座を通じて目標達成のための意欲を高める。 ・超難関校への現役合格を目指すために、3校合同対策講座や課外などによりチーム化を図り、互いに切磋琢磨できる環境づくりを行う。		

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度へ向けての改善方策
3. 積極的な活動の創成(活動創成)	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自己のリーダーシップを自覚し、より高きを目指す創造的な態度で生活している。 ・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対して当事者意識を持っている。 ・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少ないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。 ・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、交通マナー、コンプライアンスに甘えが見られる生徒が見受けられる。 ・社会を批判的に見つめ、よりよくしていこうとする態度が不十分である。 ・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる一方で、理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活を消極的に過ごしている生徒もいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発揮できる場面を数多く設定する。また、それらの行事が本来の目的に到達できるよう、生徒に適切に指導・助言を行う。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図る。また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自己と社会との密接な関わりを意識させる。 ・外部機関との連携のもと、主権者教育を充実させる。 ・学園祭等の学校行事を通して、消極的、受動的態度を積極的、能動的態度に変容するよう成功体験を積ませる取組を行っていく。 ・部活動では、継続して部室等の管理、活動時間の徹底について指導する。 ・教育相談では、気になる生徒に関するケース会議を必要に応じて迅速に開催できる体制を維持し、早期に各方面から対応する。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通し、成功だけでなくさまざまな失敗も経験させ、現実を堂々と受け止められる強さをはぐくむ。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自身の手で計画、準備、運営させることにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。			
	中高連携の発展	・中高の連携が進み、中学生に本校の特色ある教育への理解が深まっている。	・本校教育の概念図である「倉吉東高のかたち」を外部に十分に理解してもらうための広報活動が不足している。	・本校の特色ある教育活動への理解を促進するために学校案内やホームページの内容を充実させる。 ・中学校説明会でのプレゼンテーション内容を生徒の発達段階に応じたものとする。 ・本校職員が中学校訪問、授業参観、学校公開に積極的に参加するなどし、中学校の現状を理解する。			
4. 広報連携力の発展と国際理解教育の充実(連携発信)	交流活動の推進	・さまざまな国際交流の機会を通じて自国の理解を深めると共に、他国の文化や価値観を理解・尊重し主体的な交流が促進されている。	・3年生は昨年度の韓国研修旅行で韓国の文化・歴史を肌で感じ、韓国への興味関心が高まっている。また、江原道の生徒の訪問の際は、多くの生徒が舞踊団の迫力ある舞台に感銘を受けて交流に対する気運は高まっている。	・安養高校の生徒の受け入れの際には時期を見て説明会を行い、自発的な希望者を募る。 ・国際交流の意義を理解し、交流を促進させるために、有識者を招いての講演会を企画する。 ・国際交流の機会を適切に捉え、東高ホームページや広報誌で紹介することで生徒や保護者と情報を共有し、交流の輪を広げる。			
5. 定時制教育の充実(定時制)	授業規律の確立と授業改善による学力向上と希望進路の実現	・規律ある学習態度が維持されており、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・生徒の授業に対する理解度や満足度が高く、学習意欲や学力が向上している。	・授業の規律は概ね守られており、進路実績も良好である。 ・3年生は多くの生徒が卒業後の具体的な目標を持っているが、1・2年生の中には目標が定まらない生徒もいる。 ・生徒の理解度や満足度は高い。 ・学習意欲が低いため積極的に学習に取り組めず、学力の低い生徒もいる。	・年度当初に教職員間で授業規律について再度共通理解し、生徒へも周知を図る。問題のある生徒へは、全教科・全職員で毅然とした指導を行う。 ・進路目標の決まらない生徒に対しては、適性検査や進路講演会などで刺激を与えながら面談を行い、早期に適正な進路目標を設定できるよう指導を行う。 ・生徒の理解度や満足度の維持向上を図るために、生徒の学習歴や特性を理解した上で、授業改善に努める。 ・学習の楽しさや意義を伝えながら、学力の低い生徒を支援する。			
	生徒の主体性の育成	・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことによって、社会で必要とされる力を身につけることができる。	・生徒会執行部のメンバーは行事に主体的に関わることで色々な力を身につけている。	・引き続き生徒会行事を生徒会主体で企画運営していく。 ・交通マナーの徹底やあいさつ運動など、生活面でも生徒会執行部が主体的に呼びかけができるような場面を設定する。			
	積極的な生徒指導	・生徒の実態を的確に理解し、様々な機会で積極的に生徒との関わりを持ち、時期を捉えて効果的な指導を行うことができる。 ・校外での生徒の様子を把握し、家庭と協力しながら生徒を支援することができる。	・毎日の情報交換会で生徒に関する情報を共有し、効果的な生徒指導を行っている。 ・家庭訪問や保護者会を通して、学校の教育活動や生徒の学校での様子を理解してもらうとともに、家庭での様子や保護者の思いを把握することができている。	・情報交換会の内容を充実させるとともに、アンテナをさらに高くして、生徒のわずかな変化も把握できるよう努める。 ・本校ホームページや配布物を通して学校からの積極的な情報発信を継続する。 ・新入生や転編入生の保護者とも家庭訪問(5月)を通して協力体制を構築する。 ・家庭からいつでも相談ができるよう、担任を中心とする学校側の受け入れ体制を整える。			

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取組が効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60％～80％の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40％～60％の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40％未満である。